

ゴールデンウィークの山から

「最近、若い人たちも山に登るようになったね」

「若い人を見かけると頑張ってるね、なんて声かけちゃう」

なんていう会話も耳にする昨今だ。しかし、単純に喜んでいられないような気がする。登山者の増加の理由が、マスコミ主導型というか、ファッション化の行き過ぎにあるようで、心配になる。

ゴールデンウィークの山、大津講師は唐松岳に登った。八方尾根を登って行くと、へっぴり腰で下ってくる登山者がいた。足元をみると4本爪アイゼンにストック。我らがパーティーは全員目が点になったとか。そりゃそうでしょう。冬靴にワンタッチアイゼン、手にしているのはピッケル。1月には雪上訓練も受け、準備万端で臨んだ唐松岳に、向こうは4本爪アイゼンにストック。

小屋に到着、アイゼンを脱いで中に入る。大津講師が受付手続きしている間にも、アイゼンをはいたまま、ガキガキと音を立てて入ってくるパーティーがいる。入り口に、「外でアイゼンを脱ぐように」という張り紙があるのに、アイゼンをはいたまま小屋に入ってくる、どういう神経しているんだろうか。

天気もいいので、小屋の外で景色を楽しんでいると、6本爪アイゼンで五竜岳に向かう登山者が少なからずいるのに啞然とする。唐松岳の先の牛首の岩場の通過で渋滞。眺めていて、ハラハラしたと、大津講師は報告。話しを聞いていると、残雪の山のメイン装備が6本爪アイゼンになっちゃってる。昔も軽アイゼンで登ってくる輩がいたが例外で、山を知らない危ない奴ということで周囲から冷たい目で見られていた。周囲があったのである。

奥利根の平ヶ岳を山スキーで往復してきた長澤講師は、鳩待峠に向かう相乗りタクシーで一緒になったのが、スニーカーで行く気になっているカップル。運転手さんに、その格好じゃ無理だよ、鳩待ち峠で長靴借りて行けと、注意されていたとか。

ぼくは鈴鹿・御在所岳に登ってきた。下りの中道で、岩場のあるコースなのに、小さな子連れのパーティーが何組もいる。午後3時過ぎているのに登ってくるパーティー、しかも子連れに、びっくりさせられた。ぺったんこの靴はいて登ってくるカップルもいた。山を知らずに、山に登ってくる人たちが間違いなく増えている

老若男女、山に登れば誰だって元気になるんだから、日本中の皆さんに山に登って貰いたいと思う。「一億二千万人総登山者化計画」を提唱する理由である。

しかし、山は非日常世界をプレイグラウンドにしているということだけは、しっかり認識しておいて頂きたい。自分の安全は自分で守るしかない、自己責任に目覚めたら6本爪アイゼンで残雪の山に出掛けられるはずがない。しっかりした登山者育成が急務である。